

市民による震災アーカイブとしての手記集

—記録しつづける会の活動変遷と、
アーカイブ活動を通じた被災地連携の試み—

阪神大震災を記録しつづける会
事務局長
高森順子

発表内容

1. 市民団体「阪神大震災を記録しつづける会」の概要
2. 手記文中から垣間見える
「震災体験なるもの」と「わたしの体験」のせめぎあい
3. 安藤衣子さんの10年間の手記から考える
心の変遷のアーカイブについて
4. 10年間の市民アーカイブを支えた「編集者」と執筆者の対話
5. まとめに代えて「市民アーカイブ」で繋がる神戸—東北

1. 「阪神大震災を記録しつづける会」の概要

- 1995年～2005年 年1冊、10年に亘り手記集出版を行う
- 10年間に投稿された手記は1134篇
- 会の創設者は印刷業を営んでいた高森一徳
→2005年に一徳が他界、その後約5年間は活動休止状態
- 2010年 手記執筆者同士の交流会を開催。
年1回交流会を開き、今年2月9日で4回目を迎える。



手記執筆者交流会の様子
(2010年2月6日・2011年1月15日)

「阪神大震災を記録しつつける会」の手記集 (全10集)



1995/3/15締切
73篇/240篇



1995/10/31締切
68篇/229篇



1996/10/31締切
54篇/185篇



1997/10/31締切
52篇/134篇



1999/1/31締切
61篇/120篇



2000/1/31締切
40篇/82篇



2001/1/31締切
18篇/36篇



2002/9/30締切
8篇/14篇

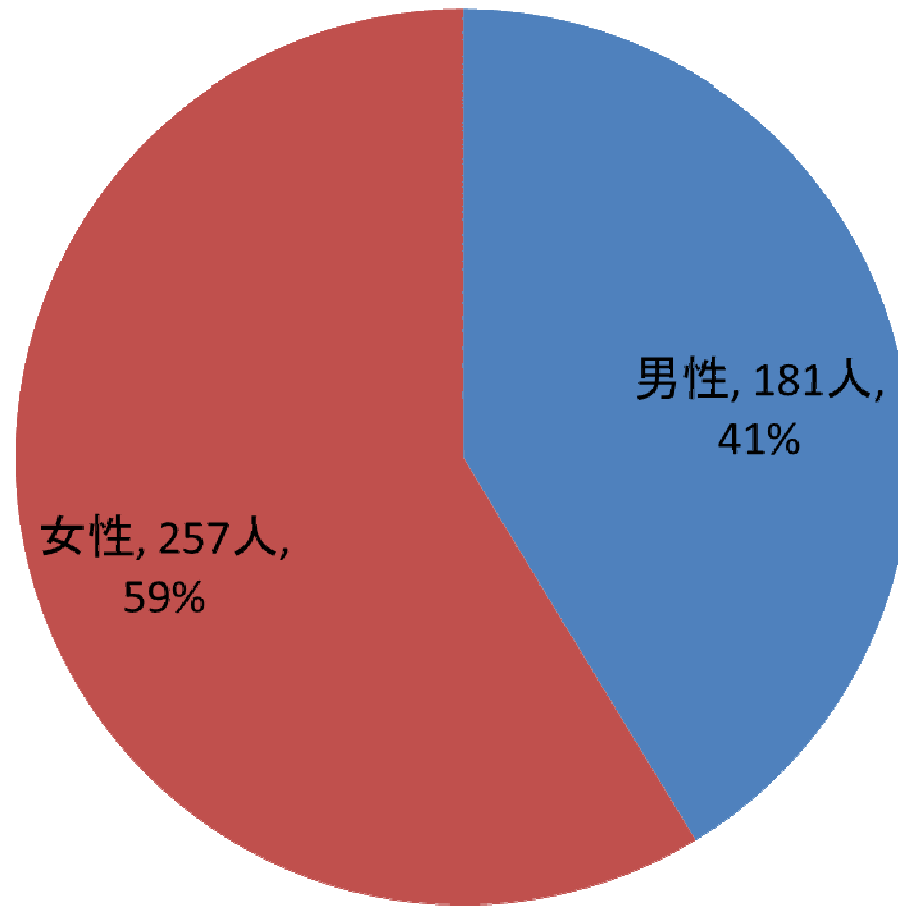


2003/9/30締切
15篇/36篇

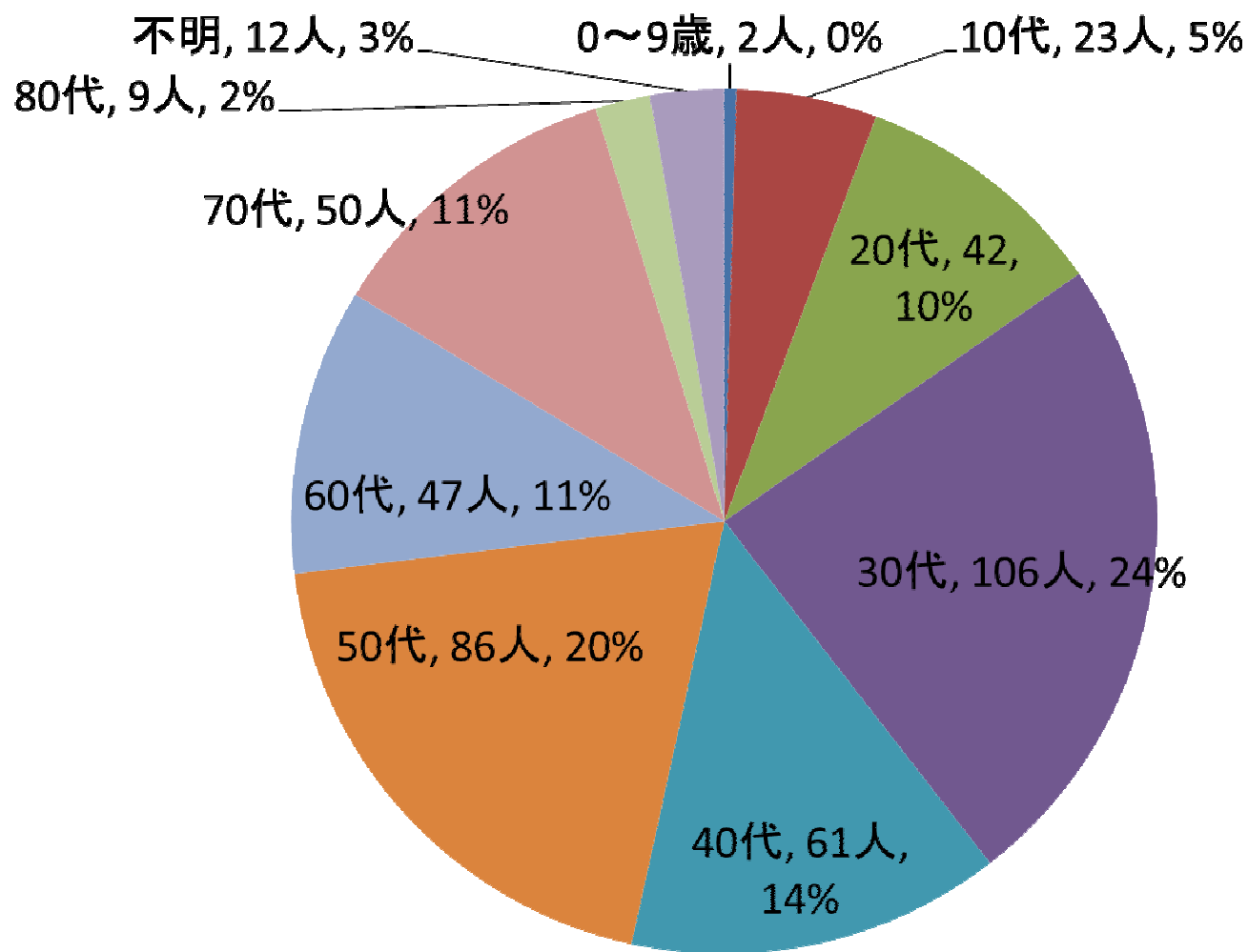


2004/9/30締切
44篇/58篇

全10集（438篇）に掲載された 手記執筆者の男女比



全10集（438篇）に掲載された 手記執筆者の年齢



手記集第1集および全10集の執筆者居住地域

地域名	第1集	構成比	全10集	構成比
神戸市	44	60.3%	245	55.9%
西宮市	7	9.6%	36	8.2%
海外	6	8.2%	12	2.7%
東京都	3	4.1%	10	2.3%
明石市	2	2.7%	12	2.7%
津名郡	1	1.4%	3	0.7%
宝塚市	1	1.4%	9	2.1%
三田市	1	1.4%	4	0.9%
川西市	1	1.4%	1	0.2%
大阪府	1	1.4%	18	4.1%
尼崎市	1	1.4%	9	2.1%
芦屋市	1	1.4%	14	3.2%
国内その他	0	0.0%	52	11.9%
不明	4	5.5%	13	3.0%
総計	73	100%	438	100%

2. 手記文中から垣間見える 「震災体験なるもの」と「わたしの体験」 のせめぎあい

近田育美さん「失われた右手」

手記集第二集『阪神大震災もう一年、まだ一年』

(1996年発刊)

岡部真記さん「不平等な幸(さち)」

手記集第六集『阪神大震災 2000日の記録』

(2000年発刊)

失われた右手

近田育美

私の従兄弟は、右手を失いました。一般的に言われる労働災害事故です。労働災害事故のことを、なぜ、阪神大震災の体験記に記すのかと言われそうですが、私はこの労働災害事故が、地震が起こっていないければ、なかったと思うからです。

手記集第二集

『阪神大震災 もう一年、まだ一年』

(1996年発行)

失われた右手

近田育美

私の従兄弟は、右手を失いました。
一般的に言われる労働災害事故です。
労働災害事故のことを、なぜ、阪神大
震災の体験記に記すのかと言われそう
ですが、私はこの労働災害事故が、地
震が起こっていないければ、なかつたと
思うからです。

手記集第二集

『阪神大震災 もう一年、まだ一年』

(1996年発行)

近田さんの手記について

近田さんの従兄弟は、法的には「被災者」とは見なされない。

また、社会からも「被災者」と見なされない。

一方、執筆者（近田さん）は彼の体験は被災体験であり、彼は被災者だと見なしている。

また、当然ながら、震災体験の手記集にこの体験が収められている。

不平等な幸

岡部真記

家族も友達も死ななかつた。

「神戸出身なの？ 震災に遭ったの？ 被害はどうか？」
「みんな無事だったよ、中には、私が「みんな無事だったよ、大変だったけど」と言う人が時々いる。」
その度に私は自分が伝えたのはそんなことでは無いと思いきり、口をつぐむ。

手記集第六集

『阪神大震災 2000日の記録』

(2000年発行)

不平等な幸

岡部真記

家族も友達も死ななかつた。

「神戸出身なの？ 震災に遭ったの？ 被害はどうか？」
「みんな無事だったよ、大変だったけど」と言う人が時々いる。

その度に私は自分が伝えたいのはそんなことではないと思いきり口をつぐむ。また伝える自信がなくて。

手記集第六集

『阪神大震災 2000日の記録』

(2000年発行)

岡部さんの手記について

被害が少なかったことを言うとき「少しがっかりしたような顔をする人」を目の前にして、体験を伝えることのためらいが示されている。

この手記から、災害体験を語る際には、「震災体験なるもの」に適う内容が良いという、人々の期待があるということ。

そして、その期待に反して、自らの体験を伝えることの困難さが読み取れる。

「震災体験なるもの」と「わたしの体験」の せめぎあい

- そもそも震災体験とは、多様な体験である。
- しかし、社会的な出来事(震災)においては、社会のなかで「震災体験なるもの」が形成される。
- 例示した二人の手記には、このような社会的に共有されている「震災体験なるもの」に対して違和感を示し、抵抗を試みようとしている様子がみてとれる。

手記の執筆は、

「震災体験なるもの」へ抗うための手段でもある。

3. 安藤衣子さんの手記から考える 心の変遷のアーカイブについて

安藤衣子さんの10年間の手記

(1995年～2005年発刊)

新しいものが生まれる

主人がいない、死ぬはずがない、元気な人なのに。不安の気持ちがない、実化した。七時過ぎに近所の人主をみつけて下さった。階段の中ほどで手首だけがのぞいていました。その手を握りながら、生きてほしかった。「何故、死ぬんや、生きてほしかった」

(中略)

主人の口ぐせは「古いものが滅び、新しいものが生まれる」
飛躍する言葉を通り、神戸の町が大きく
飛躍する事を願っていると思います。

手記集第一集

『阪神大震災 被災した私たちの記録』

(1995年発行)

寂しさを本に

落ち着いてくるにつれ、一月十七日の事がよみがえってきます。

(中略)

ほんとうに息が絶えていたのだからか？
大きな梁の下敷きで声が出なかつたのではないだろうか？
苦しくて痛くて辛い思いをしたのではないだろうか？

手記集第二集

『阪神大震災 もう一年、まだ一年』

(1996年発行)

ひとりであたり

ない、つままでたつても、忘れることのでき
ない、私の心を憎く思うことがある。つもりな
で、私がこの受けるご入りに記憶がよみがえ
り、私の心が過去に戻ります。出され、ど
んなにか悔いたかばかか思っている。面、二人だけ
の、世界を作ります。しか、思っている。ではないか
不安を感じます。して、いる。ではないか
それでも、二人の世界ができません。あがるものなら、

手記集第四集

『阪神大震災 それぞれの四年目』

(1999年発行)

命ある限り

嬉しい時に心の底から喜べないもう一人の自分を、冷やかな目で見ている自分がいるのです。長い間この気持ちには続きませんでした。今思えばこれは病気にかかっていたのですね。

四苦八苦していた私が、主人のとき「時間が解決しか考えられなかったとき」時間が解決してくれるよ」と励ましてくださった人々の顔が浮かびます。
(中略)

ありがとうございます。命ある限り。自分の人生を歩んで行きます。命ある限り。

手記集第十集

『阪神大震災から10年』

未来の被災者へのメッセージ』

(2005年発行)

心の変遷のアーカイブについて

- 手記執筆者は、自らの震災体験を解釈するために手記を綴る。そして、その解釈は時間とともに変化する。
- 震災体験は、震災直後に「書き綴り」「聞き取り」するだけでは、十分とはいえない。
ex. 安藤さんの震災から3か月後の手記と1年後の手記
- 心の変遷を記録することは、「変化していること」だけを記録するのではない。変化しないことも、記録することではじめて「変遷」を辿ることができる。

4. 10年間の市民アーカイブを支えた 「編集者」と執筆者の対話

- 「震災体験なるもの」に抗い、「わたしの体験」を綴るための対話
⇒手記は、執筆者自らが独力で書き綴ったもの、というよりも、むしろ、執筆者と編集者の対話によって、協働で作られられたもの。
- 長期に亘る心の変遷を、変化も停滞も含め、記録するための対話
⇒変化しないことを書き綴ることは、執筆者にとって苦痛も伴う作業。対話によって、その「意義」が共有されていった。

まとめに代えて
「市民アーカイブ」で繋がる 神戸—東北
写真集



NPO法人20世紀アーカイブ仙台 編

『3.11キヲクのキロク

—市民が撮った3.11大震災 記憶の記録—』

写真集『3.11キヲクのキロク』

- 8mmフィルムに収められた仙台の原風景を集めることを趣旨に創設したNPO、20世紀アーカイブ仙台が製作する写真集
- 震災後、市民の写真を集め、Web上に公開する『「3.11」市民が撮った震災記録』活動を開始。ウェブ上で公開した写真を含め、約18,000枚から選んだものを写真集として出版。
- 昨年、定点観測サロン「みつづける、あの日からの風景」を開催。
- 2013年3月には、定点観測写真をまとめ上げた『3.11キヲクのキロク、そしてイマ』を刊行予定



2011年4月24日 若林区

越冬したアゲハ「しんちゃん」
が玄関先で羽化。

新たな希望が感じられた。



2011年8月31日 塩釜

仮設住宅で育てている
「はるかひまわり」

手記集と写真集

二つの市民アーカイブに重なりあう特徴

- 『3. 11キヨクのキロク』の“震災写真”
写真を見ただけでは、およそ「震災の写真」とは思えないものがある。
 - …「震災体験なるもの」と「わたしの体験」のせめぎあい
ex. 近田育美さん「労働災害事故」
- 「キヨクのキロク」から定点観測写真へ
 - …震災体験は、震災直後に「書き綴り」「聞き取り」するだけでは、十分とはいえない。
ex. 安藤衣子さん

まとめに代えて

「市民アーカイブ」で繋がる 神戸ー東北

- 記録しつづける会と連絡を取りあう、東北の人々からは、手記の感想は意外にも少なく、記録する「行為」に対して関心がある。
- 震災体験は多様で、個別具体的なもの。
共通の「震災体験」を元に連携するという方法は困難。また、そのような方法では、本来人々が持っている体験の多様性も失いかねない。
- 市民アーカイブは、体験の差異を越えて、共通の問題や展望を見出すこともできる。

アーカイブを通じて、他の被災地と繋がることで、
より多様で豊かな災害伝承ができるのではないか。

明石市

三

五

四八

高森

「一歩前進」「二歩後退」

やっと自転車の乗り方ようになった

「ガッ」「ハッ」です。平成十四年十一月二十四日

日月曜日、午前十四時十五分、通学途中、

歩道で、普通乗用車と接触してしまいました。

一日停止をしまして、動車が通り過ぎた。

待つ態勢でいたが、自動車の方向指示灯を、

確認したのが遅かったです。震動が強いので、

そこまで確認出来ませんでした。大分元気にな

なって来たと言っています。左側

を見て右側を見たのは、逃げようのない一

瞬でした。大きな自転車と私は押し倒さ

れました。スピードが出たのは、なかつた事が、

大事故に陥らなかつたのです。自転車には、

夫婦と子供は二人が乗ってあります。子供は、

の指令の時と同じ命令のなると一方的に、私

の足の痛みなどを見直して。奥さんいぬく、

ご清聴ありがとうございました

阪神大震災を記録しつづける会
事務局長
高森順子